

今日の説教のポイント<使徒言行録13章>

①パウロたちと日本にきた宣教師たちに共通する情熱に打たれる。

今日の箇所には、パウロたちが初めて伝道した小アジアの町で起こった出来事が記されています。ユダヤ人々からの「ひどい妬みと口汚いののしり」(45)、迫害と追い出し(50)等、幾多の艱難が待ち受けていた、とあります。それでも彼らはイエス・キリストの福音を伝道せずにはおれなかったのです。

同じように、日本に最初に来た宣教師たちも大変でした。先日、伊勢佐木町の古本屋で、横浜に来た宣教師たちのことが詳しく載っている雑誌を手に入れました。開国2年後、1861年に一番若い宣教師として来日した29歳のJ.H.バラと結婚して間もない弱冠21歳のマーガレット・テイト・バラ。122日の船旅後に上海で二人を迎えた牧師があまりに若い彼女を見て言ったそうです、「あなたは大変お若いですが、人生の困難に会った時、決してくじけてはなりません。どんなことに会ってもくじけないで十字架の傍にお立ちなさい」と。その彼女が、キリシタン禁制中の1865年に日本で初めてバラから洗礼を受けた矢野隆山の病床の姿に心打たれて、日本に骨を埋めようと決心したのです(1909年没、山手外人墓地に墓)。2000年前も150年前も変わらない伝道へのパッション(情熱)を覚えさせられます。今日は、日本で最初のこの海岸教会が出来て140年目になることを覚えてなす礼拝ですが、私たちも彼らのことを思いながら、皆で福音の伝道に取り組んでまいりましょう。

②福音の恵みはユダヤ人から異邦人へ移った？ 福音の恵みはユダヤ人にも異邦人にも、受けることを望む人全てに与えられる恵みです。

パウロは、彼を妬み罵ったユダヤ人に向かって、「私たちは異邦人の方に行く」(46)と言っています。しかし、実際にはその後も、行く先々でまずユダヤ人の会堂に入ってキリストの救いについて語りました。パウロはユダヤ人を見離れたわけではありませんし、キリストを拒絶した人にもまた自分の罪に気づく時が与えられると信じていたのです、放蕩息子の例え(ルカによる福音書15章)のように。私たちは、教会創立141年目に向かって、この神様の破格の恵みをますます宣べ伝えて行く教会になりたいと思います。